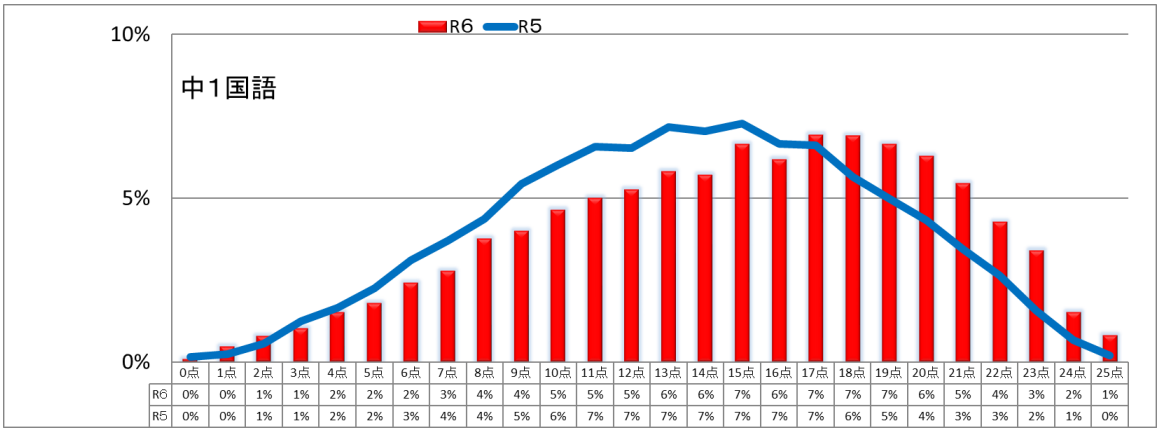
令和６年度岩手県中学校新入生学習状況調査　指導資料　　令和６年７月発行　岩手県教育委員会

授業改善の手引　中学校第１学年国語

１　調査結果

(1)　分布状況



	0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点	11点	12点	13点	14点	15点	16点	17点	18点	19点	20点	21点	22点	23点	24点	25点
R6	0%	0%	1%	1%	2%	2%	2%	3%	4%	4%	5%	5%	5%	6%	6%	7%	6%	7%	7%	7%	6%	5%	4%	3%	2%	1%
R5	0%	0%	1%	1%	2%	2%	3%	4%	4%	5%	6%	7%	7%	7%	7%	7%	7%	7%	6%	5%	4%	3%	3%	2%	1%	0%

○　問題数は昨年度と同様の 25 問、正答数の最頻値は 17 問、平均正答数は 13 問です。平均正答率は 59%、正答数の最頻値より高い正答の割合は 50%、低い正答の割合は 40%です。

（正答数の最頻値：該当する生徒数の最も多い正答数）

(2)　領域等の正答率

領　域　等		正答率 （　）は R5 新入生学調	
〔知識及び技能〕	（７問）	69%	(61%)
〔思考力，判断力，表現力等〕「A話すこと・聞くこと」	（４問）	58%	(65%)
〔思考力，判断力，表現力等〕「B書くこと」	（６問）	57%	(52%)
〔思考力，判断力，表現力等〕「C読むこと」	（８問）	53%	(44%)

(3) 結果概要

○　小問ごとの正答率において、「１(1)話の内容が明確になるように、構成を考える」問題が 83%、「２(7) 日常使われる敬語を正しく使う」問題が 82%で、比較的正答率の高い結果となりました。

○　領域等においては、〔思考力，判断力，表現力等〕「B書くこと」が 57%（＋５ポイント）「C読むこと」が 53%（＋９ポイント）、〔知識及び技能〕が 69%（＋８）と昨年度を上回り、「A話すこと・聞くこと」が 58%（－７ポイント）と、昨年度を下回りました。

○　経年比較問題となっている「４(4) 文章の構成を捉えて読む」問題が 50%（+21 ポイント）と昨年度を上回ったことは、要旨を把握するために、事実と感想、意見などとの関係を、叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えながら読むことの指導の成果と考えられます。

●　経年比較問題となっている小問ごとの正答率においては、「３(2) 描写を基に、登場人物の心情を捉える」問題が 51%（-4 ポイント）と昨年度を下回り、指導の工夫が必要な状況にあります。

●　経年比較問題の、「４(3) 文章の要旨を捉えて読む」問題が 21%（＋１ポイント）、「５ 資料から読み取ったことをまとめて書く」問題が 33%（＋２ポイント）と、それぞれ昨年度と同程度の結果となっており、課題が継続しています。

小問正答

問題番号 大問	中問	小問	通番号	調査問題のねらい	学習指導要領との関連	主な観点	備考	正答率	選択No. 1 選択	2 選択	3 選択	4 選択	5 誤答	6 正答	9	0 無解答
								(%)								
1	(1)		1	話の内容が明確になるように、構成を考える。	5・6年 思判表 A(1)イ	話聞		83.1	6	8	83	2	1	0		0
	(2)		2	話の内容が明確になるように、構成を考える。	5・6年 思判表 A(1)イ	話聞		44.0	44	3	24	28	1	0		0
	(3)		3	目的や意図に応じた資料を活用する。	5・6年 思判表 A(1)ウ	話聞		64.0	15	64	12	8	1	0		0
	(4)		4	相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら話している。	3・4年 思判表 A(1)イ	話聞		39.2	0	0	0	0	54	39		7
2	(1)		5	文の構成について理解する。(主語と述語)	3・4年知技(1)カ	言葉		65.0	0	0	0	0	35	65		1
	(2)		6	「周り」を正しく書く。	5・6年 知技(1)エ	言葉		81.0	0	0	0	0	16	81		3
	(3)		7	「異」を正しく書く。	5・6年 知技(1)エ	言葉		56.1	0	0	0	0	31	56		13
	(4)		8	熟語の構成を意味との関わりから理解する。	5・6年 知技(1)オ	言葉		69.4	12	6	9	69	3	0		1
	(5)		9	文章全体の構成や書き表し方に着目して、文章を整える。	5・6年 思判表 B(1)オ	書		71.6	0	0	0	0	25	72		3
	(6)		10	文脈に沿って、漢字を適切に使う。	5・6年知技(1)エ	言葉		55.2	0	0	0	0	37	55		8
	(7)		11	日常使われる敬語を正しく使う。	5・6年 知技(1)キ	言葉		81.6	0	0	0	0	14	82		4
	(8)		12	「飛散」を正しく読む。	5・6年 知技(1)え	言葉		72.5	0	0	0	0	22	72		5
	(9)		13	目的や意図に応じた書き方の工夫を捉える。	5・6年 思判表 B(1)ウ	書		47.1	47	8	22	20	2	0		1
	(10)		14	文章全体の構成や書き表し方に着目して、文章を整える。	5・6年 思判表 B(1)オ	書		80.3	9	2	80	8	1	0		1
3	(1)		15	描写を基に、登場人物の心情を捉える。	5・6年 思判表 C(1)イ	読		71.6	7	72	4	16	1	0		1
	(2)		16	描写を基に、登場人物の心情を捉える。	5・6年 思判表 C(1)イ	読	経年	51.0	0	0	0	0	35	51		14
	(3)		17	描写を基に、登場人物の心情を捉える。	5・6年 思判表 C(1)イ	読	経年	33.1	0	0	0	0	48	33		19
	(4)		18	表現の仕方を捉えて読む。	5・6年 思判表 C(1)エ	読		61.5	5	42	18	62	1	0		6
4	(1)		19	目的を意識して、中心となる語を見付けて要約する。	3・4年 思判表 C(1)ウ	読		65.1	0	0	0	0	25	65		10
	(2)		20	目的に応じて、必要な情報を捉えて読む。	3・4年 思判表 C(1)ウ	読		69.3	1	69	10	12	2	0		5
	(3)		21	文章の要旨を捉えて読む。	5・6年 思判表 C(1)ア	読	経年	21.3	0	0	0	0	59	21		19
	(4)		22	文章の構成を捉えて読む。	5・6年 思判表 C(1)ア	読	経年	50.1	7	50	20	12	1	0		10
5			23	根拠に基づいて自分の考えを書く。	5・6年 思判表 B(1)ウ	書	経年	64.2	0	0	0	0	13	64		22
			24	資料から読み取ったことをまとめて書く。	5・6年 思判表 B(1)ウ	書	経年	32.8	0	0	0	0	42	33		25
			25	段落構成を考えながら指定された長さの文章を書く。	5・6年 思判表 B(1)イ	書		44.8	0	0	0	0	30	45		25
					全体正答率			59.0								

２　指導のポイント

⑴　伝えたいことがよく伝わるように、相手の状況を踏まえて理由や事例を選んでいく学習を大切にしましょう。

ア　問題の概要

1（４）相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら話している。 第３・４学年〔思考力，判断力，表現力等〕Ａ「話すこと・聞くこと」（１）イ　正答率　39.2％

イ　誤答分析

「くさらない（食品）」と「時間がかかる」という２つの内容を書いていることを条件としていますが、誤答を分析すると、どちらか一方のみの内容を記述していたり、全く関係のないことを解答したりしているものが多く見られました。これは、【調べてわかったこと】の「○注意すること」の記述に着目した解答と考えられます。しかし、この問題では、スピーチで述べている三つの注意点を挙げた理由を答える必要があります。「くさらない食品である」のは「寄付までに時間がかかる」からという因果関係を捉えられなかったことが誤答の要因と考えられます。

この問題では、相手の知らないことについて丁寧に理由付けしたり、相手にとって理解しやすい事例を挙げたりする力が求められます。特に、伝えたいことがよく伝わるよう、相手のことを踏まえて理由や事例を選んでいくような学習過程が必要です。

ウ　指導上の留意点

（ア）　伝えたいことがよく伝わるように、相手のことを踏まえて理由や事例を選びながら、自分の伝えたいことの中心が聞き手に分かりやすくなるよう話の構成を考えることについては、小学校第３学年及び第４学年（「Ａ　話すこと・聞くこと」の指導事項イ）で学習しています。このことは、中学校第１学年（「Ａ　話すこと・聞くこと」の指導事項イ）の、自分の考えや根拠が明確になるように、話の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係などに注意して、話の構成を考える学習につながります。

（イ）　指導に当たっては、具体的な相手や目的を一層強く意識して、話の中心が明確になるように理由や事例などを挙げて、筋道を立てた構成を考える学習を積み重ねることが大切です。

⑵　登場人物の心情について、登場人物相互の関係に基づいた表現の仕方に着目して読むことのできる言語活動を位置付けましょう。

ア　問題の概要

3（３）描写を基に、登場人物の心情を捉えて読む。 第５・６学年〔思考力，判断力，表現力等〕「Ｃ読むこと」（１）イ　正答率 33.1％

イ　誤答分析

無解答率は 19％でした。誤答を分析すると、「那彩たち」が「夢中になれるもの」や「あっとう的な情熱」をもっていることは捉えているものの、そのことに対して「うらやましい」と思う「千春」の心情やその変化を捉えるまでには至らない解答が多く見られました。これは、「千春」の心情を、「那彩」との関係に基づいた会話や行動、地の文などから捉えられていないことが原因だと考えられます。

この問題では、登場人物の相互関係や心情の変化などを、描写を基に捉える力が求められます。そのため、登場人物の相互関係に基づいて、登場人物の心情を直接的あるいは暗示的に表現している複数の描写を基に捉える力に課題があると考えられます。

ウ　指導上の留意点

（ア）　登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えることについては、小学校第５学年及び第６学年（「Ｃ　読むこと」の指導事項イ）で学習しています。このことは、中学校第１学年（「Ｃ読むこと」の指導事項イ）の、場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写を基に捉える学習につながります。

（イ）　指導に当たっては、登場人物の相互関係を捉えた上で、行動や会話、情景などに注意して読み進めることが大切です。例えば、登場人物の心情の変化を捉え、感想を書く言語活動などを通して、生徒が、物事の様子や場面、情景、行動や心情などの描写に着目しながら、複数の描写を結び付けて、心情の変化を捉えていくことができる学習過程にするなどの工夫が考えられます。

⑶　要旨を把握するために、文章の各部分だけではなく、文章全体の構成を捉える学習活動を位置付けた単元デザインにしましょう。

ア　問題の概要

4（３）文章の要旨を捉えて読む。 第５・６学年〔思考力，判断力，表現力等〕「Ｃ読むこと」（１）ア　正答率 21.3％

イ　誤答分析

全体の約６割が誤答、無解答が約２割でした。誤答を分析すると、6段落の２分目に「ズレ」という言葉があることから、同じ文にある「常にゆれ動く心のありよう」や「一度形にしてしまえば」といった叙述をもとに解答しているものが多く見られました。これは6段落を構成する２つの文の関係性を捉えられなかったことが要因であると考えられます。また、6段落の一文目にある「千変万化」という言葉が、２文目の「ゆれ動く」という叙述と同義であることを理解していないために、中心となる筆者の考えが捉えられていないことも考えられます。

この問題では、事実と感想、意見などの関係を、叙述を基に押さえながら、文章全体の構成を捉える力が求められます。

ウ　指導上の留意点

（ア）　事実と感想、意見などとの関係を、叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することについては、小学校第５学年及び第６学年（「Ｃ　読むこと」の指導事項ア）で学習しています。このことは、中学校第１学年（「Ｃ　読むこと」の指導事項ア）の、文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係などについて叙述を基に捉え、要旨を把握する学習につながります。

（イ）　指導に当たっては、要旨を把握するために、文章の各部分だけではなく、文章全体の構成を捉えることが大切です。その際に、「話や文章の構成や展開」と関連付けながら、叙述を基に、書き手がどのような事実を理由や事例としてあげているのか、どのような感想や意見をもっているのかを説明したり、複数の文章を比較し、その違いについて交流したりする学習活動が考えられます。

⑷　複数の情報を比較したり関連付けたりしながら、自分の考えの根拠となる事柄を捉え、根拠を明確にして書く学習を大切にしましょう。

ア　問題の概要

5　条件②　二つの資料から読み取ったことを根拠にして書く。 第５・６学年〔思考力，判断力，表現力等〕「Ｂ書くこと」（１）ウ　正答率 32.8％

イ　誤答分析

この問題では、複数の資料から適切な言葉や数値を用いて記述する力やそれらを関連付けて自分の考えを明確にする力が求められます。条件①の自分の考えを書くことの正答率が 64.2%と前年度と同程度であったのに対し、条件②の考えを支える理由や根拠の記述に誤答や無解答が多く見られました。誤答の多くは、どちらか一方の資料にのみ着目し、二つの資料の関連が十分ではないものや、資料から読み取ったことではなく、自分の体験を基にして理由や根拠を挙げているものでした。特に、文章と図表という種類の異なる資料から読み取った情報を基に、それらの情報を比較し関連付けながら根拠を明確にして考えを形成することに課題があると考えられます。

ウ　指導上の留意点

（ア）　目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたり、事実と感想、意見などとを区別して書いたりなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することについては、小学校第５学年及び第６学年（「Ｂ　書くこと」の指導事項ウ）で学習しています。このことは、中学校第１学年（「Ｂ　書くこと」の指導事項ウ）の、根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することの学習につながります。

（イ）　指導に当たっては、自分の考えが客観的な事象に裏付けられたものになっているかを確かめることが大切です。筋道を立てて自分の考えを述べる言語活動に取り組む中で、複数の資料から集めた材料について、考えの根拠となるものを選んだり、優先順位を付けたりしながら整理する学習過程（指導事項ア「題材の設定、情報の収集、内容の検討」）を踏まえ、複数の情報から、取り上げる事例や事実を絞り、その妥当性を検証する交流を行うことなどが効果的です。